

# ジオラマを覗くブランド

—「許されざる罪」の自己回帰性について—

丹 羽 隆 昭

## I

『イーサン・ブランド (“Ethan Brand”: 1850)』<sup>1)</sup>は、ホーソーン (Nathaniel Hawthorne: 1804-64) の数多い短編の中でも、この作家の文学的特質を最も良く示すもののひとつと言ってよいだろう。周知のごとく、これは「許されざる罪 (the Unpardonable Sin)」<sup>2)</sup>の在処を求めて諸国をめぐり、結局それを自分の心の中に発見する標題人物の最後の日を描く寓話物語である。主人公イーサン・ブランドは、グレイロック山 (Graylock) [E B 83] の麓で石灰を焼く教養のない労働者だったが、窯の炎を見つめるうちに「許されざる罪」という想念の虜となり、その探求がひとつの教育手段として働くに及んで、自分の知性を如何なる人間も及ばぬほどに鍛え上げたものの、その代償として「情」を喪失してしまう。「人類の磁力の鎖 (the magnetic chain of humanity) [E B 99]」を自ら断ち切って冷たい観察者となったブランドは、人間同胞をみな自分の知的好奇心の実験対象とし、文字通り操り人形の糸をたぐるように利用する悪魔と化す。かくしてブランドが、彼なりの最大の努力の結果作り出したものは、他ならぬ「許されざる罪」だったというのである。このブランドの高邁ながらも悪魔的な探求の物語は、同じ石灰焼労働者のバートラム (Bartram) の粗暴な物質性と対比され、更にはブランド帰還を聞きつけて集まる村の飲んだくれ連中の低俗な人間臭さと対比されることで、一段と強調さ

れる。

『イーサン・ブランド』は、これを一個の文学作品として見るならば、格別優れた出来映えを示すものとも言いにくい。『計画倒れに終わった長編の断章 (“A Chapter from an Abortive Romance” [E B 83])』という何とも奇妙な副題が説明するように、物語展開にはいくつか唐突で不適切な部分<sup>3</sup>が見られ、作品が隅々まで有機的連関性を持つためには、もっと大きな外枠の存在が必要だと思われる。また全体的に動きが乏しく、物語が紙芝居の一場面に終始するような観がある。物語の舞台はグレイロック山麓の石灰窯の前にほぼ固定され、主たる動きといえば、ブランドが「探求」の旅から戻り、集まった俗っぽい村人たちと言葉を交わし、その後ひとり残されて、これまでの人生を回想した後、燃えさかる窯に身を投じると、翌朝バートラムがブランドの遺骸を窯の中に発見し、棒でそれを粉々に砕く、というだけのものである。またこの物語が、「許されざる罪」の在処を求めて世界中を巡る男という、読者が具体的なイメージを描きにくい、いかにも寓話という設定であることも、作品から現実感を奪っているように思われる。一般読者、特にリアリズムを評価する読者にとっては、さして見るべきもののない作品かもしれない。

しかしながら、少なくとも、ホーソン文学にとっての『イーサン・ブランド』の重要性は、いくら強調されてもよいだろう。何よりもこの作品は、ホーソンの最重要主題「許されざる罪」を直接扱い、作家がこの罪の定義を行っている唯一の作品である。ホーソンの代表作に遍く登場する「許されざる罪」なる主題についての議論は、『イーサン・ブランド』を抜きには出来ない。ホーソンの「許されざる罪」は、誰しも漠然とは知る宗教的次元の意味に立脚しつつも、この作家特有の、芸術創造の社会学という次元の意味まで包含する、多様な意味の広がりを見せる主題だが、その最も本質的な一側面、すなわち自己回帰性を『イーサン・ブランド』は誠に鮮やかに呈示しているように思われる。赤々と燃える石灰窯の火とその炎の中から囁きかける悪魔、その囁きに応じて世界を一巡するブランドの旅、ブランドが帰還したそのグレイロック

山麓に現れるユダヤの行商人と彼の持つ（そしてブランドが覗き込む）ジオラマ、滑稽な老犬の回転運動、などなどはみな主人公の罪の本質を呈示する。そしてさらにまた悪魔と化した主人公ブランドを焼き滅ぼすという物語展開の背後に、こうした物語をする自分自身を一種の「許されざる罪」の下手人として自己批判する作家の姿も見えるのである。以下『イーサン・ブランド』に示された「許されざる罪」の自己回帰性、およびその意義について検討してみたい。

## II

まず、この寓話物語の主人公が探し求める「許されざる罪」の宗教的意味と典拠を確認しておこう。通常これはキリスト教における「聖霊を冒瀆する罪（the sin against the Holy Ghost）」のことであり、そのものずばりの語はないものの、新約マタイ伝やマルコ伝などに言及が見られる。マタイ伝 12 章には、悪霊が取りついて目も見えず物も言えない者を、イエスがその悪霊を追い出して治癒したが、その業を神のものでなく悪魔のものとしてイエスを非難したパリサイ人たちの行為に言及し、これこそ神が唯一許すことのない罪に当たると書かれている。

Wherefore I say unto you, All manner of sin and blasphemy shall be forgiven unto men: but the blasphemy *against* the *Holy Ghost* shall not be forgiven unto men. (Matthew 12:31)

パリサイ人たちによる狡猾なイエス攻撃という文脈の中で言われる「聖霊を冒瀆する」行為とは、故意に神を中傷する、神の意図に逆らうことを指すものとされる<sup>4</sup>。また旧約にあっても、例えば民数記 15 章 (30-31) には、故意に神の法を破る者はヤーウェの慈悲から切り離され、民たちからも見捨てられることが記されている。

このように聖書では「許されざる罪」に関していくつかの記述があるが、「許されざる罪」という語そのものは見当たらない。また聖書の記述に用いられている動詞は普通“pardon”ではなく“forgive”であるのも、些細なことかもしれないが、注目される。“The Unpardonable Sin”という語の典拠のひとつは、ホーソンも愛読したバニヤン (John Bunyan: 1628-88) の信仰告白『溢れる恩寵 (*Grace Abounding to the Chief of Sinners*: 1666)』かもしれない。そこにはバニヤンが、これまで自分の犯した罪を吟味しつつ、もしや「許されざる罪」に該当するものがありはしないかと恐れる件りがあり、“that sin unpardonable”という語が用いられている。

I feared therefore that this wicked sin of mine might be that sin unpardonable, of which he [Christ] there thus speaketh, . . .<sup>5</sup>

ホーソンの一次資料中にその証拠はないが、彼における直接の典拠のひとつとしての可能性は高いと思われる。またホーソンにも馴染みだった *A New History of the Holy Bible* (London: 1752) には、この罪に関する Thomas Stackhouse の注釈があり、聖霊に対する冒瀆が許されないのは結局その罪を犯す者が最後の救済手段さえ拒み、悔恨の意志も能力も欠くがゆえだとされ、そこで “... the sin against the Holy Ghost is unpardonable” という語句が用いられていたという。これもまたホーソンにおける典拠のひとつかもしれない<sup>6</sup>。

この「許されざる罪」を求めて旅し、それを己の心の中に見出すという主人公イーサン・ブランドの名前そのものにも少々注意が必要と思われる。イーサン (Ethan) とはヘブライ語で “strength” を意味するが、旧約の列王記上第4章には賢者ソロモンを称える際のひとつの比較対象「エズラ人 (びと) エタン」<sup>7</sup>として、それは登場する。

For he [Solomon] was wiser than all men; than Ethan the Ezrahite,... (I Kings 4:31)

またブランド (Brand) とは焼き鑊などで付ける「烙印」のことだが、もとより聖書の文脈にあっては、人類最初の殺人者カイン (Cain) に対して神が与えた「印 (mark)」を指す。英語の “the brand of Cain” が、「殺人者の烙印」たるは周知の事実であろう。神に背いて弟アベルを殺したカインは、アベルの血を吸って呪われた大地が不毛とされたため「地上の放浪者 (a vagabond in the earth)」となるが、今度は人がみな自分を殺そうとするのではないかと恐れる。そうされないように、と神はカインにある「印」を与え、カインを殺す者には7倍の復讐を与えると告げる。

And the Lord said unto him [Cain], Therefore whosoever slayeth Cain, vengeance shall be taken on him sevenfold. And the Lord set a mark upon Cain, lest any finding him should kill him. (Genesis 4:15)

かくしてイーサン・ブランドという名前には自ずと、大いなる知恵者、大罪の烙印を背負って地上を放浪する者という意味が備わる。

このような名を帯びた知的放浪者が「許されざる罪」を探し求めて世界中を旅し、それを己の心の中に見出すというホーソーンの物語の筋立ては、既にそれ自体聖書の寓話として成立する意味を帯びている。もともと聖書のカインは、神に逆らって弟を殺し、神の問いにも嘘で応じる大罪を犯し、簡単には殺されないようにと烙印を押され、果てなき放浪へと駆り立てられる男であって、人類最初の「許されざる罪」を犯した者と言ってもよい。カインはブランドの原型のひとつなのだ<sup>7</sup>。作家自身こうした聖書の文脈を十分に意識していたのは、これ以前に発表された数多くの作品の例を見れば明らかである。しかしホーソーンは、こうした文脈の上に彼独自の数々の意味、つまり19世紀アメリカ社

会、更にはその中で活動する小説家としての自らの問題などを重ね併せている点を見逃してはならない。ホーソーンの「許されざる罪」は、検討するほどに明らかになるが、いろいろな点で彼独自の主題に仕上がっているのである。

### III

『痣 (“The Birth-mark”: 1843)』のエイルマー (Aylmer)、『ラパチーニの娘 (“Rappaccini’s Daughter”: 1844)』のラパチーニ博士 (Dr. Rappaccini)、『緋文字 (*The Scarlet Letter*: 1850)』のチリングワース (Chillingworth)、『七破風の家 (*The House of the Seven Gables*: 1851)』のピンチオン判事 (Judge Pyncheon)、『ブライズデイル・ロマンス (*The Blithedale Romance*: 1852)』のホリングズワース (Hollingsworth) やウェスタヴェルト (Westervelt) などなど、『イーサン・ブランド』の前にも後にも、ホーソーンにあっては、その代表的な作品を彩る中心的人物をめぐる「許されざる罪」という主題が飽くことなく展開する。また例えば『緋文字』ではチリングワースは当然ながら、ヘスター (Hester) やディムズデイル (Dimmesdale) の性格に内在する傲慢な部分に対しても作家の批判が向けられている。『ブライズデイル・ロマンス』ではホリングズワースを批判する側のカヴァデイル (Coverdale) の覗き見趣味にも批判が向けられているなど、往々にして同一作品内の別の登場人物に関して同じ主題がある程度展開している事実があり、読者はこの主題の遍在性に驚きを禁じ得ない。「許されざる罪」は、それが明確な形を取る 1840 年代以降の作品だけでなく、例えば『牧師の黒いヴェイル (“The Minister’s Black Veil”: 1836)』や『ウェイクフィールド (“Wakefield”: 1837)』など、比較的初期に属する 1830 年代の作品にも既に見られる。一見殉教者のごとくに思える牧師の心に宿る手に負えぬ傲慢さ、自分の不在時における妻の行動を覗き見する夫の自惚れと好奇心などに、「許されざる罪」の萌芽は既にはっきり見て取ることができる。

このようにホーソン文学に遍在する「許されざる罪」に関して、注目すべきひとつの事実は、冒頭でも触れたごとく、『イーサン・ブランド』以外では作家がこの語を事実上用いておらず、同様にこの作品以外にあっては事実上定義も示していないということである。他には創作ノートの『アメリカン・ノートブックス (*The American Notebooks*)』に、1844年(日付は不詳)の記載として、他ならぬ『イーサン・ブランド』執筆用のメモがあり、そこにこの罪および罪の定義が見い出せるのみである。よってホーソンの「許されざる罪」は『イーサン・ブランド』固有の主題という見方もできないわけではない。ブランドだけが、エイルマーやチリングワースなどの他の主人公たちと違って、「故意に」神への挑戦を試みる点を強調すればそうも言えよう<sup>8</sup>。先述のごとく、聖書の記載も神への意図的反抗に言及していた。しかしホーソンにおける「許されざる罪」は必ずしも神への「意図的」挑戦を前提とはしていない。ブランドのみが、その「意図的」挑戦ゆえにこの罪に当たるというわけではないのだ。作家の語義規定もその意図には触れていない。大局的に見れば、むしろホーソンは、ごく人間的な動機から、結果的にではあれ、神の領分を侵犯する大罪に至るブランド以外の主人公たちにも全く同等か、それ以上の共感を示していると言うべきであろう。また「故意に」神への挑戦を試みる「悪魔」ブランドとて、探求の対象が他ならぬ自分の心の中にあるという皮肉にやっと気づき、自嘲の暗い笑いを山野に轟かすのだが、ここには限りある視界しか持ち得ぬ人間の宿命、つまり「原罪」が示唆されており、作家の共感を見ることが出来るのである。

さて「許されざる罪」についてのホーソンの語義規定であるが、物語の初めの部分で彼は、同業者パートラムに「許されざる罪」とは何か、と問いかけさせ、それに対する答として主人公に

...the sin of an intellect that triumphed over the sense of brotherhood with man and reverence for God, and sacrificed everything to its mighty claims. [EB 90]

だと言わしめている。また先述の創作ノートには、

The Unpardonable Sin might consist in want of love and reverence for the Human Soul; in consequence of which, the investigator pried into its dark depths, not with a hope or purpose of making it better, but from a cold philosophical curiosity, — content that it should be wicked in whatever kind or degree, and only desiring to study it out. Would not this, in other words, be the separation of the intellect from the heart?<sup>9</sup>

とあり、更にこの直前には“*The search of an investigator for the Unpardonable Sin — he at last finds it in his own heart and practice.*”という『イーサン・ブランド』のプロットと思われるものが書かれている。今日我々が接する形での短編作品『イーサン・ブランド』と創作ノートの記載を併せれば、作家が言う「許されざる罪」とは、要するに、知的好奇心を満たすため、冷淡に他人の魂を覗き込む、「知」と「情」の均衡を崩した人間による邪悪な罪（行為）ということになろう。意外にもあいまい、かつまた抽象的な定義である。この定義に該当する罪を犯す者は、ブランドに留まらず、エイルマーやチリングワースをはじめ、先述のホーソンの代表的登場人物——これを「許されざる罪人」と呼ぼう——の殆どに充てはまると言ってよいだろう。反面、ブランドは、ホーソンの一連の関心が極めて純粹かつ究極の形を取って現れた例と見ることができる。しかしいずれにせよ、ホーソンの「許されざる罪人」たちに実際見られる罪行為は、作家自らの定義を越える複雑で多彩な要素を帯びる。ホーソンはいつも定義以上の事柄を盛り込んでいるのであるが、このこと自体、作家のこの主題に対する関心が並々ならぬこと、この主題が決して宗教的レベルに留まらぬ大きく切実な次元のものたるを雄弁に物語っている。

## IV

ホーソーンの「許されざる罪」に関して最も特徴的な事実は、対象批判が自己批判を伴うことだろう。対象批判は通常、近代科学に象徴される人間の傲慢、自己中心性へと向けられる。「許されざる罪人」に科学者の設定が多いのは周知のとおりで、ホーソーンの目に映じた近代科学は、それこそ「人間との同胞意識や神への尊敬の念を蔑ろにし、その途方もない要求のためあらゆることを犠牲にする」というブランドの言葉そのものの側面を有していたと思われる。旅から戻った彼が回想のうちに示す過去の経歴、つまり「素朴で愛すべき人間 (a simple and loving man) [E B 82]」だった彼が、人類愛に基づく「探求」を始め、「徐々にだが驚嘆すべき変化 (the gradual, but marvellous change [E B 98])」を経て悪魔と化す過程は重要である。

He had lost his hold of the magnetic chain of humanity. He was no longer a brother-man, opening the chambers or the dungeons of our common nature by the key of holy sympathy, which gave him a right to share in all its secrets; he was now a cold observer, looking on mankind as the subject of his experiment, and, at length, converting man and woman to be his puppets and pulling the wires that moved them to such degrees of crime as were demanded for his study. [EB 99]

「知」と「情」の均衡を崩し、「人類の磁力の鎖」を切断し、「冷たい観察者」と化して「人類同胞をみな自分の知的好奇心の実験対象とし、操り人形のごとくに操った」ブランドは、人を人とも思わず「観察」と「実験」に血眼となった近代科学の悪しき一面を表すものだろう。ホーソーンの「許されざる罪人」たちはみな奇妙に「観察」と「実験」にこだわる。しかし、対象たる人類同胞を徹底的に「観察」し、「実験」しながらに操るのは科学だけではない。実のところ、それは芸術家、作家の業にも認められるものだったのである。「許さ

れざる罪人」ブランドとは作家の自画像のごとき存在でもあった。

またエイルマーやチリングワース、ホリングズワースやウェスタヴェルト、そしてブランドに至る殆どすべての「許されざる罪人」たちの罪行為に見るごとく、ホーソーンのこの主題は催眠術（操り人形も同じ）のイメージを伴うことが多い<sup>10</sup>。催眠術はもちろん19世紀初頭から前半にかけてアメリカを席卷した疑似科学の代表である。くだんのイメージは、人間が同じ人間の魂を自由に操るこの医療技術<sup>11</sup>に、科学が宗教に取って代わろうとする時代の危険な兆候を作家が読み取ったことに起因するものだろう。更に付け加えれば、催眠術に関連してであるが、「許されざる罪」には、妻に対するエイルマーの所業や、娘に対するラパチャーニの所業、チリングワースのディムズデールに対する所業などに象徴されるごとく、サドやマゾ、はたまたレイプや近親相姦など性的倒錯の雰囲気も強く漂う。アメリカにおける催眠術が見世物へと墮していった事情とも連動する可能性があるが、これもホーソーンの「許されざる罪」の特徴のひとつであろう。だがホーソーンの更なる特徴は、人間の魂を操り、弄んで省みない時代の危険な兆候が、それを批判する自分の側にも存在することに絶えず思い至る点にある。チリングワースの牧師に対する精神的レイプを批判する作家は、この医者らの行為が作家の観察行為に重なるがゆえに、地獄落ちの彼に同情を禁じ得ない。またホリングズワースの農場乗っ取り行為を批判するカヴァデイルが覗き見に興じるがゆえに、この二流詩人を批判することで自らの批判をもする。「許されざる罪」は、かくして作家の罪、芸術家の罪へと転じ、対象批判が究極的には自己批判と化してゆく。すなわち、ホーソーンにおける「許されざる罪」は自己回帰的主题となってゆくのである。

この自己回帰の問題を検討する上で『イーサン・ブランド』ほど恰好の素材はない。事実「許されざる罪」なる主題の性格を象徴的に示すかのように、この短編には数多くの回帰的運動イメージが登場する。冒頭でも言及したことだが、石灰窯の火の中に住む悪魔の囁きに応え、「許されざる罪」を求めて世界を一巡し、再び元の窯に戻って火炎に身を投じるブランド、そのブランドが旅

から帰還した窯の辺りに現れるユダヤの行商人、その行商人の持つジオラマを覗き込み、己の姿に気付くブランド、滑稽な老犬の空虚な回転運動、などなどはみな主人公の罪の本質を巧妙に、まるで鏡のように写し出す。

空しい探求の果てに旅の出発点に戻るという筋立ては、ホーソーン好みで、作家が少年期から格別敬愛していた18世紀イギリス文壇の巨匠サミュエル・ジョンソン (Samuel Johnson: 1709-84)、とりわけその寓話風小説『ラセラス (Rasselas: 1759)』の強い影響を物語る。ホーソーンは処女作の『ファンショウ (Fanshawe: 1828)』においても、3番目の長編『ブライズデイル・ロマンス』においても、幸福を求めて旅に出かけ、結局空しく出発点に戻るアビシニアの王子の物語に尋常ならざる関心を披瀝している。更にこの愛読書『ラセラス』の教訓を実地に再確認するような出来事として、後に『ブライズデイル・ロマンス』を書く直接の動機ともなった例のブルック・ファーム (Brook Farm) での体験がある。ホーソーンは1841年、生活改善を夢見、大金を投じてこの運動に参加したが、やがて幻滅を覚え、1年を経ずして元の生活に戻っている。『ラセラス』の教訓も、ブルック・ファームの教訓も、結局は同根で、人間は悲しくも自分自身のことが——自分の足下が、あるいは自分の心が——いちばん見えないのだということだった<sup>12</sup>。

自分の足下がいちばん見えない、自分の心こそ最初に探求すべき対象という、『ラセラス』や「ブルック・ファーム」の教訓には更に、かつて清教主義が強調した、人間は「原罪 (the Original Sin)」を背負ったがゆえに、つまり知恵は備わったものの完全性を喪失したがゆえに、限定された視界しか持ち得ないという厳しい人間観が重なり合っていると行ってよいだろう。

ところでこのブランドの回帰運動は燃え盛る石灰焼の窯から窯という形を取る。窯の火炎を見つめて瞑想に耽るうち、炎の中から悪魔が囁きかけるところから彼の探求は始まり、探求の後再びブランドは悪魔と交わるべくして窯の炎の中へ消える。この窯の炎がバニヤンの『天路歷程 (The Pilgrim's Progress: 1678, 1684)』の中に見える「地獄に通じる穴」を下敷きにしたものであるこ

とは、ホーソン自らが作中で語っているので明白である。「快適な山 (the Delectable Mountains)」の羊飼いたちが好んで巡礼に示したというこの火炎の見える穴は、『緋文字』にも登場する。天国に至る入り口のすぐ脇に地獄へ通じる口が待ち構えているというバニヤンの警句は、そのままホーソンの世界観の一部を成す。

さて、この火炎燃え盛る石灰焼の窯は、もちろんそれそのものとしては、石灰石を焼いて生石灰を生産するための窯である。生石灰はガラス、陶器、セメントなどの生産や砂糖の精製などに不可欠な物質で、更には土地改良用あるいは殺虫剤としても広く用いられた。のどかなマサチューセッツの高原地帯の山肌に立ち並ぶ異様な石灰窯は、折から資本主義形成期を迎え、グレイロック山麓にも及んできたアメリカ産業革命を象徴するものであり、有名な比喻を用いれば「楽園に侵入した機械」<sup>13</sup>の顕著な一例でもあったと言えよう。「火」は産業の象徴、工場の象徴だが、地獄の象徴でもあって、ブランドが当初石灰焼労働者で、「火」に仕えるうち悪魔の虜となったという設定は意義深い。

このブランドを迎える村人の一団に老いたドイツ系ユダヤ人の行商人 (old German Jew) [E B 94] が混じる。村人の一団の中心は、駅馬車屋、法律家、医者という、いずれも昔は羽振りがよかったものの、酒や煙草に溺れて身を持ち崩した俗物たちで、ブランドとはおよそ対極的な世界の住人<sup>14</sup>だが、このユダヤ人はひと味異なる。彼が「ジオラマ (diorama)」という、銀板写真や立体鏡とともに、19世紀の画期的光学発明品と称されるもの<sup>15</sup>を持ち歩いているのは興味深い。「ジオラマ」という小道具は——石灰焼の窯とともに——何よりもこの物語がホーソンにとっての紛れもない「現在」のそれであることを明示する。また一種の「覗き箱」である「ジオラマ」を持ち運ぶ「放浪のユダヤ人」とは、他ならぬブランドの分身とさえ考えられる。「許されざる罪」を求めて世界を巡り、人類同胞の心の中を覗き尽くし、その果てにそれを自分の心に発見したブランドは、彼自身「彷徨えるユダヤ人」と言えるが<sup>16</sup>、そのブランドが放浪のユダヤ行商人のジオラマを覗くという行為には、「許されざる

罪」の自己回帰的特性が、大いなる皮肉とともに、鮮やかに示されていると言ってよい。

老犬が自分の尻尾をくわえようとしてグルグル回転し、しかも果たせないというのも、むろんブランドの空虚な回帰的な探求を戯画化したもので、これも鏡に映ったブランドの実像なのだ。またこの回転運動は、ウロボロス、つまり尻尾を噛む蛇を連想させる。ウロボロスは、宇宙の統一を標榜する中世の錬金術師のエンブレムだった。ブランドの実像が蛇ならぬ老犬で、しかも尻尾を噛むことさえできないところにホーソーンの皮肉、というよりは自嘲があるろう。

## V

このように、これでもか、これでもかとばかりに回帰運動のイメージを盛り込んで作家は「許されざる罪」の重要な本質に言及しているように思われる。それは既に述べたように、人間愛と敬神の念を軽んじ、人間が創造主に代わり同じ人間を冷たく操るという、科学に代表される近代の悪しき一面が、物語をする作家自身の中にも認められるからである。ブランドを火炎に投じるという結末は、典型的かつ象徴的な作家の自己批判と言えるだろう。

しかしながら、窯に身を投げる際のブランドの孤独で自嘲的な笑いにはただならぬものが含まれている。ここで我々は、ホーソーンの初期の作品『原稿中の悪魔（“The Devil in Manuscript”: 1835）』を想起すべきかもしれない。自分の書いた原稿の中には悪魔が住むとして、出版社に出版を拒否された大切な原稿を火の中に投じてしまうオベロン（Oberon）という作家の自暴自棄を語る物語である。「私」という語り手がオベロンから話を聞く形になっているが、オベロンがホーソーンの偽らざる分身であることは言うまでもない。これは作家の処女作焼却を暗示する作品としてしばしば言及される。またそもそもこの処女作の主人公自体、悪魔に属するものとして、作家が理不尽にも葬り去ったことが思い合わされる。ブランドの焼身も、一面では悪魔を葬り去るとい

う、対社会向けの一つ必然的結末ではあろうが、『原稿の中の悪魔』におけると同種の、作家の自己憐憫の一表現という印象が強い。

『イーサン・ブランド』は、バートラムがブランドの遺骸を「奴のお陰で半ブッシュルの増産だ (half a bushel the richer for him)」[E B 102] という打算的で物質主義的なせりふを吐きながら棒で粉々に砕く場面で終わる。ブランドの物語は、この「鈍感な、中年の田舎者」と「(父親よりは) 感受性に富む (more sensitive)」息子の対話という外殻によって囲み込まれる形となっている。悪魔と対話し、悪魔と化した主人公ゆえ、これを火炎に投げ、しかも夜明けの陽光の中でその遺骸を粉々にさせてしまう結末は、保守的で健全だった19世紀中葉のアメリカ読者社会を念頭に置けば、必然でもあろう。しかし、皮肉なことに、悪魔と化したブランドの心臓および遺骸を、まるで石くれ同様に叩き割るバートラムの所業も、人間らしい「情」を全く欠くがゆえに、結構悪魔的印象を与えている。ブランドも、人を人と思わぬ所業ゆえに「許されざる罪」に堕ちたのだが、粗野で物質主義的なバートラムも案外同罪であろう。いや、同罪というよりはむしろ、かのカインの烙印に込められた呪いを思えば、創造主はブランドの遺骸を無惨に粉碎したバートラムの所業に「7倍」の呪いを用意している、とホーソーンは言いたげである。

## NOTES

- 1 『イーサン・ブランド』は、1850年1月5日付の『ポストン・ウィークリー・ミュージアム (*Boston Weekly Museum*)』紙上に発表され、次いで1851年5月の『ドル・マガジン (*Dollar Magazine*)』誌上に発表された。作品そのものは1848年12月には完成しており、ホーソーが誕生予定のさる雑誌に寄稿したものの、その雑誌が発刊されずに終わり、お蔵入りとなった原稿が数年後、作家の承諾もないままに『ポストン』紙に掲載される仕儀に至ったという。無断で物語を掲載した『ポストン』紙には“The Unpardonable Sin. From an Unpublished Work”という標題で登場し、その後、作家の承諾を得てこれを掲載した『ドル・マガジン』には“Ethan Brand; or, The Unpardonable Sin”という標題で登場している。今日、短編集『雪人形、およびその他の物語 (*The Snow-Image, and Other Tales*)』所収の一編としての『イーサン・ブラン

ド』は“A Chapter from an Abortive Romance”という副題を持つ。これはこの作品が『昔日伝説 (“Old-Time Legends”)』という、現存の『緋文字 (*The Scarlet Letter*)』を核とする予定の大部な物語 (結局未完に終わる) の一部として企画されたことを示すものとなっている。しかし上述のように、当初『ボストン』紙の場合も『ドル・マガジン』誌の場合も、はっきりと「許されざる罪」という語を標題あるいは副題として前面に押し出していた点は注目に値する。確かに『イーサン・ブランド』は「許されざる罪」の物語に違いない。

- 2 Nathaniel Hawthorne, *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, William Charvat et. al. eds., Vol. XI (Columbus, Ohio: Ohio State Univ. Press, 1974), 86. 以下この全集は CE と略する。また『イーサン・ブランド』は EB と略し、引証は頁数を付けて本文中で示す。
- 3 冒頭部分での主人公ブランドの名前の出方の唐突さがその一例。またブランドの「心理学的実験」の犠牲になった女性への言及 (“the Esther of our tale” [E B 94]) などはその最たるものである。
- 4 Madeleine Miller and J. Lane Miller, *Harper's Bible Dictionary* (New York: Harper, 1952), 789.
- 5 John Bunyan, *Grace Abounding to the Chief of Sinners and The Life and Death of Mr. Badman* (New York: Dutton, 1963), 46. なお James E. Miller はその可能性に注目する。cf. James E. Miller, *Quests Surd and Absurd* (Chicago: Univ. of Chicago Press, 1967), 214.
- 6 J. X. Brennan and Seymour Gross, “The Origin of Hawthorne's Unpardonable Sin”, *Boston University Studies in English*, 3 (1957), 125-26.
- 7 Ely Stock は聖書のカインとホーソーンのブランドとの間に類似を見、前者が後者の雛形としている。cf. Ely Stock, “The Biblical Context of ‘Ethan Brand’ ”, *American Literature*, 37 (1965), 115-34.
- 8 Terence Martin はこの点に注意を喚起している。しかし、同時に Martin は、エイルマー、ラパチーニ、チリングワースなどの罪を「許されざる罪」と見なすことは “common practice” だとも言う。Terence Martin, *Nathaniel Hawthorne* (Boston: Twayne, 1983), 93.
- 9 CE VIII, 251. 次の引用も同じ。
- 10 この問題に関しては拙論 “The Unpardonable Sin and Mesmerism: A Note”, 『アカデミア』文学・語学編第 48 号 (南山大学, 平成 2 年 1 月), 61-77 を参照。
- 11 催眠術は当初は医療技術としてアメリカに導入されたが、次第に心靈術に同化、変形していったという。cf. Taylor Stoehr, *Hawthorne's Mad Scientists* (Hamden: Archeon, 1978), 32.

- 12 人はまず自分自身の探求から始めなければならぬ、とは、ホーソンと人間観において対極的なところにいたエマソン (R. W. Emerson: 1803-82) やソロー (Henry D. Thoreau: 1817-62) も説くところであり、前者の “Travelling is a fool's paradise” (*Self-Reliance*) や後者の “I have travelled a good deal in Concord” (*Walden*) などの言となって表れていて興味深い。ちなみにホーソン自身も『プライズデイル・ロマンス』の序文で、当時の流行に従ってエジプトやシリアなどに出かけてゆく友人カーティス (George William Curtis) の大旅行を皮肉っているのが注目される。
- 13 レオ・マークス (Leo Marx) の同名の著より。なおマークスの優れた『イーサン・ブランド』論がこの書物の中にある。cf. Leo Marx, *The Machine in the Garden* (New York: Oxford Univ. Press, 1964), 265-77.
- 14 但し、ブランドのように「人類の磁力の鎖」を切ることなく、その限りでは賢明で人間臭い。なお、駅馬車屋はホーソンが煙たがった叔父の職業であり、法律家と医者、作家が子供の頃、母親への手紙の中で、絶対なりたくない、と言った職業である。
- 15 The Library of America シリーズ中の Millicent Bell 編 *Hawthorne: Novels* (1983) の注には「ジオラマ」の説明に加え、これが Daguerre と Bouton の発明になるもので、1823 年ロンドンで初めて展示された、とある。同書 1266 参照。
- 16 ゴルゴダの丘に重い十字架を背負って登ってゆくキリストを「もっと速く歩け」と侮辱したため、最後の審判の時まで世界を彷徨う運命を与えられた伝説上の「彷徨えるユダヤ人」にも「許されざる罪」という概念が重なり合うと言えよう。